

審議会会議録

会議名称	平成27年度 第3回伊達市まち・ひと・しごと創生有識者会議		
議題	議事 (1) 協議事項 ①伊達市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン 骨子（案3）について ②伊達市まち・ひと・しごと創生総合戦略 骨子（案2）について		
開催日時	平成27年7月29日（水）18:30～20:25		
場所	伊達市役所 2階会議室A・B		
出席委員	石井吉春 委員、樽見弘紀 委員、宇佐美雅昭 委員、大矢大介 委員、的場重一 委員、毛利元幸 委員、川村 守 委員、進藤 慎 委員、影山吉則 委員、鍵谷好徳 委員、杉原 茂 委員、館崎雄二 委員、栗山潤一 委員、木村秀雄 委員、小畑次男 委員、松本博江 委員、矢野ゆうき 委員、尾川圭延 委員（計18名）		
	所管部課名	企画財政部企画課	
公開・非公開の別	<input checked="" type="checkbox"/> 公開	傍聴者人数	1名
	<input type="checkbox"/> 非公開	非公開の理由	
<p>【審議会の概要】</p> <p>1. 開 会（事務局：企画課長）</p> <p>2. 議 事</p> <p>(1) 協議事項</p> <p>①伊達市まち・ひと・しごと創生人口ビジョン 骨子（案3）について</p> <p>【事務局より説明】</p> <p>【質疑・意見交換】</p> <p>■座長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・目標値はこれでいくかどうかを議論して決めるということか。 <p>●事務局</p> <ul style="list-style-type: none"> ・そのとおり。 <p>□委員</p> <ul style="list-style-type: none"> ・出生率の目標値を2.1までと積極的に行っている。伊達市は高齢化健康福祉都市という認識だが、2.1になるということになると、若い人の教育、子育て環境などについて、かなりドラスティックにまちを作り変えないと、目標を達成するのは難しいと思われるが、そこを目指すということか。 <p>■座長</p> <ul style="list-style-type: none"> ・若者の数は少なくなるため、今よりも若者がたくさん増えて人口構成が若返るといったことは考えにくく、バランスでいうと高齢社会の現実は変わらない。そうした中で、若者も経済的にある程度のポジションを持てれば、人口の再生産が可能な2.1になっていくということだと思う。 			

- ・現時点で2.1が難しいというのは、出席者全員共通の認識であろう。ただし、だからといって合計特殊出生率が1.9にしても、2.1にしても、数字はほとんど変わらないだろう。
- ・どこを目指すか、ということであり、まずは1.7までは現実的な数字の達成を目指し、2.1までは希望的観測という認識である。

②伊達市まち・ひと・しごと創生総合戦略 骨子（案2）について

【事務局より説明】

【質疑・意見交換】

■座長

- ・健康寿命の数字は65歳となっているが、これは実感と数字が合わないため、一般的には70歳を超えるはず。もう少し現実的な数字を検討していくべき。

□委員

- ・総合戦略に「伊達ブランド産品」ということが書いてあるが、野菜全般か。多様な野菜ということが「ブランド化」されるとは、抽象的でつかみどころがない。

■座長

- ・多品種を一度にブランド化というのは難しいだろう。多様性を強調するというのがスタートライン。例えば、「伊達サラダ」など、多様な野菜をもう少し具体化しないといけない。

□委員

- ・K P Iで「ふまねっとサポーター養成研修」があるのはわかるが、見方によってはこれしかないと思われてしまう。市民に拡大を図ることはいいことだが、ふまねっとサポーターに限定するのはいかがかなものかと思う。

□委員

- ・農家の立場からは、ブランド化した野菜が伊達にあればいいと思う。何のためにブランド化するのかを考える必要がある。ブランド化により、農家が潤い、地域の経済が活性化するという視点でブランド化を目指すべきではないか。ブランド化が成功している産地は、その作物を作れば他の産地よりも収益があがるというのが強みだと思う。そういう取り組みが伊達市でできればと思う。
- ・UIJXターンについては素晴らしい取り組み。自分もXターンに入るのではないか。新規就農者が地域にたくさん来て欲しいという地域はたくさんあると思うが、企業が職員を採用するように、地域全体が一緒にやってみよう、と受け入れる側からのアプローチができれば。現状では、農業をやりたくてきた人に対し、「できるところまでやってみて」という、やや傍観者的なスタンスも感じるので、UIJXターンに期待したい。

□委員

- ・障がいのないお子さんのお母さんの場合は一時保育があるが、障がいのあるお子さんのお母さんの急な病気などの場合は預け先がなく、困っているお母さんがいる。
- ・放課後児童クラブも実際には障がいがあることで利用を躊躇したり、仕事をやめたりすることがある。子育てにやさしいまちの実現、ということは、健常児や障がい児にとってもやさしいまちであってほしい。

□委員

- ・子どもの預け先の確保、幼稚園、保育園、放課後児童クラブでの働く職員は足りていない。これら人員の確保をしなければ、子育てにやさしいまちの実現はできないと思う。

□委員

- ・目標は具体的ではなければ実現しない、という問題意識で資料を作成した。
- ・一点目は、介護、福祉職員のための託児所（保育所）。現場ヒアリングしていると、子育てをしながら働ける環境の整備が重要ということに気付かされた。施設内保育所を採算度外視で設置している事業所もある。働く女性が安心して働き続けることは、出生率にも好影響があると思う。そのためにも、公設民営の保育所が必要ではないかと思う。

- ・二点目、日本版CCRCに、コレクティブハウスのように多様な人が関わり、伊達版CCRCの実現をしたい。
- ・三点目は、調剤薬局のかかりつけ薬局化は浸透していないのが現状であり、伊達での積極的な活用を目指したい。

■座長

- ・若い女性の就労の処遇の悪さが、現状の出生数を抑えている部分があるので、介護保険制度とも違う枠組みでの処遇も考えていく必要があると思う。

□委員

- ・表の中の「具体的な施策」は、「施策目標」ということだと思う。
- ・「地域産品」「地場産品～」双方一つに統一してはどうか。
- ・ここは健康に寄与する農業ということだと思う。少子高齢化の中で伊達野菜の生き残りを考えていくと、脂肪吸収する等の機能性野菜や加工品の製造なども目標に入れた方が健康産業っぽくなるのではないか。
- ・定住促進について、伊達は小規模で中高年の農業が可能という土地もあり、道内から新規参入してくる人は多い。今後、高齢化が進み、半分以上は後継者がいないことを考えると、今後も一定程度新規就農者はいると思うので、積極的にゾーンを決めて、3～5名をまとめて育成していく、といったようにある程度層を固めて入れることも必要ではないか。
- ・伊達に若い人が入ってきて、合計特殊出生率が2.1以上になるというのは、安心して子ども預けられて、働けることが出来てこそだと思う。小畑委員の2つ目の提案のように、全てを保育士に任せるのではなく、高齢者が子育てを支援できるような仕組みを構築できる可能性があるのではないか。保育士を最低限配置しつつ、高齢者の経験や子どもを慈しむ想いを活用して、託児料ゼロに近い形で預けられるような仕組みを検討できるのも伊達ぐらいではないか。

□委員

- ・他の自治体と比較しても、ここまでやっている人口ビジョンはないと思われるし、骨子案2も充実してきている。
- ・総合戦略の中で、時間軸のことを指摘したい。今回5か年の計画期間であり、2019年度までに一応の終結を迎えると思う。5年いっぱい時間がかかるものもあれば、すぐに終わるものもあると思う。また、次期総合計画に引き継ぐものもあると思う。重点施策をどれにするかということになる。
- ・施策の相互連関について、3つの施策が相互連関して相乗効果を生むのだと思う。他のカテゴリーと関係するものもあると思う。
- ・データの収集も必要で、それを個人へフィードバックしていく、そのためにはこういう野菜を食べましょう、運動をしましょうということになると思う。身体が悪くなれば、「ケアシステム」と関わってくる。かかりつけ薬局や、CCRCでは空き家の活用（家、店舗展開）、それらの取り組みが地域経済の振興ということも期待できるかもしれない。
- ・モニターツアーは外部に見せるということで、伊達の人がどのように健康生活を送るよう工夫をしているかを見てもらうことで、半定住、観光にも結びつくのではないか。
- ・いくつかの重点施策については時間軸に落とし、どのように相乗効果、連関をさせていくかということを示すことが重要ではないか。

□委員

- ・経済に関する視点で言えば、どこが事業主体となってやっていくか、ということに尽きる。
- ・外貨を稼ぐためにどうするか、核となる必要がある。経済中心で地方創生をやっていくべき。
- ・伊達市の開業件数が年間20数件であることを踏まえると、基本目標で健康産業を100事業所というのは、あながち無理な数字ではない。
- ・起業していくには、入念な準備や資金調達をすることが重要になる。そこに金融機関として支援していきたい。
- ・北海道で一番伊達が開業しやすい、そういうことをPRする母体も必要。

□委員

- ・定住促進のための環境整備について、具体的に考えてみた。今の看護専門学校は3年制であり、卒業後ほとんどが伊達市外の札幌や東京都市部へ集中している状況。また、4年生の大学へ進む学生も多い。そのため、今年入学は30名定員について17名しか入学者がいない。
- ・今後、高校生のうちから看護について意識していただくため、説明会を開催する等学生確保を今のうちからしていくことが、定住促進の整備につなげていけるかなと思っている。

□委員

- ・30数年間の教員生活で北海道くまなく転勤して、色々な研究会に出てきたが、出席者のレベルが高いと感じている。
- ・骨子はさらに具体策を詰めていく、ボリュームの増幅があるということでもよろしいか。具体的に誰がしていくのか、ということがわからないので、より、具体的にされていくということでもよろしいか。

■座長

- ・まず骨子をつくってそれを具体化に展開し、さらにローリングして具体的な形になっていくことになる。

□委員

- ・了解した。より具体化されていくことを期待したい。
- ・例えば、保育では、保育マンション、病児の保育専門、NPOの誘致、子育て支援マンション、0～3歳の乳幼児の医療費無料化、4～6歳の医療費半額補助などあるのではないか。
- ・地域で住み続けるには5点ほどあると思う。雇用、子育て、高度な医療、優れた教育（伊達の歴史の誇りを持たされることは非常に重要、完結型の機能）、安心安全（治安がよい）。
- ・経験値でいうと、伊達市内で高校まで教育を受けると、当地に戻ってくる可能性があるという実感がある。ただし、現状では中学校卒業者のうち90名が高校から室蘭へ行ってしまっているのは由々しき事態ではないか。
- ・高等教育機関がないのは大きな欠点。公立の小規模の高等教育機関があるとよりいい。また、芸術と文化がある。特に演劇の素晴らしい文化がある。若者を惹きつける可能性がある。
- ・若年者が多く流出していることを考えると、もう少し高等教育機関のことを考えていってもいいのではないか。小規模でもいいので公立大学を設置することは有効だと思われ、20年後役立つと思われる。

□委員

- ・トータルで考えた場合、取り組み主体を、もっと盛り込んでいくべきではないか。組織化していくことではないか。
- ・子ども達を総合戦略の中に主体的に関わらせる仕組みを考えていくべき。子どもを動かすためには、教育現場の人間が動かざるをえない。そのためには、小中学校の先生達の意識を変えていかなければならない。

□委員

- ・基本目標の伊達市内に事業所等は、新規開業か。

■座長

- ・状況によるのではないか。

●事務局

- ・新規というよりも既存の事業所も含め100が健康産業に手をあげるということを考えている。

□委員

- ・特に健康産業部分での基本目標の数字と施策の中身とがつながっていない印象を受ける。

□委員

- ・漁業の方も海外需要が出てきている。ブランド化の話もでてきたが、野菜だけでなく、海のものも入れられればさらに付加価値がでるのではないか。

- ・加工場もあるため、加工品をつくることによって経済循環も期待できる。
- ・後継者不足もあるが、今3名ほど研修もきている。しかし、今後増えるかという点、なかなか難しい。一個人自体が会社組織になっていくことが理想ではないか。そうすると雇用も増えるのだろう。

□委員

- ・健康産業の施策について、「外貨を稼ぐ」という視点からブランド化が記載されている。ブランド化というのは、従来では、1品目のロットを集めて大量に出荷するという点であり、いくつか試みてきたが、伊達の場合は土壌が地域によって大きくことなり、同一品種を同じ品質で統一することが難しいという課題があった。
- ・そのため、現在では、伊達市は春先から初冬まで展開でき、一産地でも多くの品目がとれるという特徴を活かし、消費地を絞り込んで安定的に供給し、価格を維持していくという戦略をJAとしては取り組んでいる。

□委員

- ・誰がやるのか、がポイント。行政が司令塔だろう、役割分担として誰がやるのかということはどう割り振れるか、今後に期待したい。

□委員

- ・高齢者の人が主体の目標だと夢がないような気がする。もう少し明るい目標も取り入れた方がよいのでは。市民の人にも理解してもらう必要がある。

□委員

- ・健康産業の中の「外貨を稼ぐ」ということで、観光物産館について、これは就労の場の確保ということで2の「定住支援」にも言えるのではないかと感じる。
- ・たくさん羅列をすれば計画が進められるのかということもある。子育てにやさしいまちの実現の中をみると、重複しているところもあると思う。

□委員

- ・骨子自体は、網羅的でバランスのとれた、実現可能性を加味されたもの。ただし、圧倒的に面白い施策、聞くだけでワクワクするような施策がないと盛り上がらないのではないかと。
- ・誰がやるのか、ということにつながっていることで、KPIはこのままでいいとしても、努力目標なのか、誰とゴールを共有しているのかを整理すべきでは。
- ・突出した伊達方式の3～4つを議論しないと突き抜けられないのではないかと。伊達じゃないとできないことをやりたい。例えば、金融機関。資金提供という側面的支援で重要な役割があるが、実際には貸してくれない。それを、「伊達方式」は貸してくれる、といった「伊達方式」を位置付けて、PRしていく必要があるのではないかと。
- ・看護専門学校で定員に満たないという話があったが、若い人が楽しむことができる環境が重要ではないかと。

■座長

- ・色々意見が出て有益だった。今日の議論を踏まえて、次回資料をとりまとめた。

3. その他

●事務局

- ・次回は8月26日、同じ会議室、同じ時間で開催予定。

4. 閉会